

# 想うがままに

忘れがたき人④  
外柔内剛の人 大森誠人さん

本誌編集委員 小寺山康雄

一九六四年の秋、ぼくは大阪市北区高垣町の統一社会主義同盟(統社同)本部を訪ねた。応対してくれたのは、その年の第三回大会で村田恭雄さんから書記長を引き継いだ大森誠人さん(一九二九〜九五)年)だった。

留年してまだ大学に在籍しているが、ゆくゆくは職業革命家になりたけい。そのためには労働運動を経験しなければならぬ。できれば戦前からの伝統に輝く全国金属のオルグの口を紹介してほしい。共産党のセクト主義を廃し、腐敗する民同からヘゲモニーを

奪取するために頑張りたい。

意気盛んにして格調高いぼくの演説を辛抱強く聞いていた大森さんはこう言った。「ちょうど自治労府本部にアキがある。鈴木美雅(一九二八〜〇一年)に頼んでやるが、三年は勤められるだろうな」と。

革命も労働者階級使命論もまったく出てこないことに唾然としているぼくに委細かまわず、大森さんは「最低三年は勤めてもらわんと俺の顔が立たぬ。無責任に辞められると、次から誰も紹介できんようになる」と、念を押

すのだった。

同じ関西といっても、生まれも育ちも神戸のぼくには、大阪の泥臭いまでのしたたかき、徹底したリアリズム、何かというところ「それはリクツや」で片付ける気風には、その後も長い間なじめなかつた。大森さんはそのなじめぬ異文化の主やのような存在だった。

## 関西に来て良かった

### 労働運動は天職

大森さんは生粋の東京下町っ子で、一橋大学を中退して共産党の専従にな

り、労働運動に飛び込んだロマンチストであること、党の命令で朝鮮戦争反対のピラをリュックサックいっぱい運び、担ぎ屋に間違われて逮捕された、雅気愛すべき人物であることを知ったのは、家族ぐるみで付き合いをするようになってからである。

親しくなるきつかけは、どうにも飯が食えなくなつた大森さんに、勤めてまだ三年にならなかつたぼくが、自治労書記のポストを譲り(二年勤めるのだぞ)とおそれおおくて言えなかつたが、ぼくも世話になつた当時府議会議員の和田貞夫さんに頼んで堺の府営住宅をあつせんしてからである。

当時五百円のサントリーレッド大瓶をぶらさげて、大森宅をしょっちゅう襲ううちに、ぼくは下戸だった大森さんをひとかどの酒呑みにしてしまった。酒の肴は革命論議から人の悪口まで縦横無尽だった。六〇年代中葉、大森さん三十代半ば、ぼく二十代半ばの

頃である。

あのまま東京に居たら、今頃は便利なガリ切りで終わつていただろう。関西に来て本当に良かった。内海ものの魚の旨さを知つたのも幸せだ。労働運動は天職だと思つている。京都時代の全金、大阪に来てからの教組、自治労、全電通の仲間と出会つたことはぼくの最大の財産だ。死ぬまでに一冊でもいいから革表紙・金文字の本を書きたい。それには原典に当たらねばならない。この間安仁の家に泊まつたら、あの安仁(ママ)が英語の本を読んでいた。シヨックだった。ぼくもウエツプだけでなく、労働運動発祥の地イギリスの文献をもつと読みたい。

こんな話を寡黙の大森誠人が延々喋り続けるのである。拳句の果てに「君も酒ばかり呑んで勉強しないと、あの〇〇のようになつてしまうぞ」と、ぼくには十分すぎるダメージを与えるオチで締めくくるのだから始末に負えない。

ぼくの酒で酔っ払いながら何という言い草だと頭にきたぼくは、革表紙・金文字の本を書く奴を偉いと思うのは勝手だが、あなたの価値観を押し付けるな。ぼくは生涯一シヨックとして生きるんだ、と大見栄を切つた。

あれから四〇年、よもやつれあいの食客として惰眠をむさぼる体たらくになろうとは想像だにしていなかつた。

## 五度にわたる脳腫瘍手術

### 途半ばに終わった理論の発展

七二年二月、厳寒の日、大森さんは最初の脳腫瘍の手術をした。北野病院の誰も居なくなり、暖房も照明も切られた待合室で、英子夫人(一九二八〜九四年)と、まだ中学生だった一人娘の順子さんの三人で手術の終わるのをじつと待つていた。

医者というのは無神経にできているもので、主治医は手術が成功に終わったこと、幸い悪性腫瘍ではなかつたこ

とを説明しながら、切除したくるみ大の腫瘍を無造作にウィスキーグラスに入れたまま「はい、これがそうです」と英子さんの目の前に突き出した。長い長い緊張が解けたこともあったのだろ、それを見た英子さんは仰向けに昏倒してしまった。なすすべもなく側に突っ立っていたぼくは、なぜ支えてやらなかったのかと、医者にこつぴどく叱られたが、気が利かないのはどっちだと、憤慨したものだ。

それから五回も再手術するなんて思いもしなかった。二回目手術のあと、中岡哲郎さんと一緒に見舞いに行つたときのことである。大森さんは青白い頬を紅潮させて怒りをぶちまけた。俺は実験台にされている。東大全共闘が糾弾した台脳外科医のように、俺の脳を削り取って生体実験しているのだと、大変な剣幕で息まいた。

そのときは手術のあとの興奮が沈着冷静な大森さんをして神経をとり乱さ

事前協議制と職場の労働協約制などに大森さんの関心は広がっていった。しかし、それを全面的に発展させるには手術の後遺症は苛酷にすぎた。

### マルクス夫妻のように

#### 相次いで亡くなった

統労同(準)の仲間は実践的にも独自の領域を開拓した。教職員の仲間は部落解放教育運動から出発して、公立学校に通う在日朝鮮人の子どもの民族的自覚と自立のための、おそらく日本で最初の教育実践を展開した。西成区長橋小学校から始まったこの運動は、就学猶予という名の学校と地域からの障害者の排除と隔離の壁を突破する闘いへと発展していった。

大阪市職下水道支部の仲間は、市当局の市民に対する情報秘匿と改ざんを内部告発し、反公害運動における労働者と市民の新しい関係をつくった。

ぼくは仲間のこうした営為をもっと

せたのだろうかと思っていたが、今になって考えると、本当に五回も手術する必要があつたのか。医者はじゅうぶんインフォームドコンセントをしたのか。手術を重ねるたびに心身の障害を重ねていく大森さんを見るにつけ、ぼくは大森さんの怒りにも一定の根拠があつたように思えてならない。

一九六九年一月三〇日、統社同を脱退したぼくらは翌年五月に大森誠人、松葉武雄、市川正昭(一九二八〇八年)さんと統一労働者同盟(準)を結成した。教組と自治労の二〇歳台を中心にした数十人の小さな政治組織だつた。ぼくはその専従になつた。

統労同(準)時代は本当によく勉強したと思う。レーニン主義に回帰した統社同(フロント派)に対抗して、ぼくらはグラムシに傾注した。ちょうどその時期、現代の理論社からグラムシの問題別選集(全四巻)が刊行されたことも好都合だつた。

広い場に広げるにはどうすればよいか。そして、ぼくらが統社同を脱退してから拡散している学者の人たちとのつながりをどうすれば回復できるか。社会主義理論政策センターの構想は、こうしたことを大森さんと議論していくうちに練り上げられていった。

全電通の柴田範幸さん(一九二九〇九年)、社会党の荒木伝さんという類稀な名オルガナイザーと出会うことによつて、統労同(準)、統社同はもとより構造改革派の枠をはるかにこえた幅広い知的センターとして、一九七七年五月理論センターは発足した。最盛期会員数一二〇〇人、学者百数十人を擁し、機関誌月刊『社会主義と労働運動』は、一九九七年の解散まで二〇年間一度も休刊することなく刊行された。

理論センターで大森さんは常任幹事、ぼくは事務局次長を務めたが、八年、新左翼の協働組織「自治・連帯・共生の社会主義をめざす政治連合」を

六八年チェコの「プラハの春」、フランスの「五月革命」、六九年イタリアの「熱い秋」を通底する思想を「工場に労働者権力(管理)を」と捉えたぼくらは、グラムシ思想の源流である工場評議会運動を懸命に研究した。同時に、構造改革派の労働運動論を超えるものとして熊沢誠さんの理論に接近した。熊沢理論の唱える「労働と仲間の関係を問う」テーマは、グラムシの「ヘゲモニー階級としてのプロレタリアートの力の源泉は市民社会の基底である工場にある」というテーゼにびつたり重なるのである。それはまた、レーニンの「外部注入論」の超克でもあつた。

大森さんはコミンテルンの赤色労働組合主義批判から始まって労働組合の自立性と労働者階級の統一の絶対性、さらには企業別組合の工場委員会的性格と機能の可能性を追究した。教組運動における教研と職員会議の位置付け、自治労の自治研、全電通の合理化

つくるためにぼくは辞任した。同時に、大森さんと会う機会がほとんどなくなった。英子さんの葬儀で数年ぶりにお会いしたとき、大森さんのぼくに對する記憶がほとんど失われていることを知ってショックだつた。

英子さんは誠人さんと幼馴染で、おとなしい誠人さんとは対照的におきよんなな江戸娘だつた。関西に向かう誠人さんの後を追っかけて、一九五一年世帯を持った。手術のたびに身体機能が衰え、ついには車椅子生活になった誠人さんのために六〇歳近くになって運転免許を取り誠人さんを職場まで送迎した。その上、英子さんは婦人民主クラブの中心的活動家でもあつた。

前年、つれあいの英子さんを脳出血で亡くした大森さんは生きる気力をなくしたのかもしれない。誤嚥性肺炎で四〇度近い発熱をして、緊急入院した病院の人工呼吸器のなかで静かに息を引き取つた。